

若者の「生きる力」を育むには

今後の持続可能な社会づくりのためには、社会を担う青年層の「生きる力」を育むことが重要である。その育成のためにNPO法人LEAFとCELが共同開発した、年間を通じて第一次産業分野での学びが体験できるプログラムが始動した。

第一次産業を基盤とした総合的な学びの社会デザイン

子どもたちの「生きる力」を育む機会が必要

児童・青年層の「生きる力(人間力・生活力)」が弱体化している。その原因として、「自然や地域社会と深く関わる機会の減少」、「集団生活の不足」などが挙げられる。では、彼らの感性や生きる力を育むには、なにが必要なのだろうか。まず考えられるのは、現在の若年層に不足している、自然体験、生活体験、社会体験である。

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)は、NPO法人子ども環境活

動支援協会(LEAF)(*1)と協働し、持続可能な社会づくりを担う青年層(小学生・大学生)を育成するため、農・林・水産業などの第一次産業分野での総合的な体験学習の機会を創出し、生活力を育む学びの社会デザインの研究を2011年度から行ってきた。第一次産業を担う「農林水産省近畿農政局」、「兵庫県農政環境部」、「兵庫県漁業協同組合連合会」、「兵庫県森林組合連合会」、「兵庫六甲農業協同組合」、「生活協同組合コープこうべ」にもメンバーとして参加していただき、研究会を設置して、協働で学びの社会デザインと体験プログラムを検討した。

まず、第一次産業および食を巡る課題を抽出し、次に、将来を見据えた学びの社会デザインを検討するため、50年後の社会像の概観を取りまとめた。各団体・機関が行っている体験学習の課題の抽出も行い、総合的な生活力を育むための学びの要素、学びの社会デザインの検討、そして、第一次産業を基盤とする学びの体験学習プログラムを策定した。以下、その概要を紹介する。

人口減少社会における第一次産業のあるべき姿

第一次産業および食を巡る課題としては、食料自給率の低下、海外からの

(*1) 兵庫県西宮市を拠点に市民・事業者・行政の連携で、食・農・自然・環境などの社会的課題に取り組み、持続可能な社会システムづくりを目指しているNPO。

安い輸入品や食生活の変化による国産品の需要量の減少、従事者の減少と高齢化および後継者不足、耕作面積の減少、水質浄化による海の貧栄養化に起因する漁獲量の減少、森林病害虫や野生動物による被害の増大、食生活の変化(「日本型食生活」から「欧米型食生活」へ)による生活習慣病の増加、食と第一次産業とのつながり、および第一次産業間のつながりについての認識不足、食品廃棄物の増加、食品産業の事業活動の過程でエネルギーや資源を使用することによるCO₂排出などの環境負荷の増大など、非常に多くの問

題が挙げられる。一方、50年後の社会像はどうなっているだろうか。日本の人口は2010年をピークに減少し、2100年には現在の1/3まで激減する。この人口減少社会では、1億2000万人時代の狭い国土や乏しい資源と比較して、有効活用しうる土地や資源が多くなる。また、高度経済成長下で軽視された「食物を作って食べる」という基礎生活力の必要性が再認識され、それは農業をはじめとする第一次産業の再評価につながる。これからの時代には、農林水産業の復権が期待されているのである。

しかし、高度成長社会で重視された分業システムのため、第一次産業同士でのつながりは弱まってしまっている。今後は、農業、林業、漁業および消費者が相互補完し強め合う、自立循環型社会を目指す必要がある(Chart 1)。

総合的な生活力を育む学びとは

「総合的な生活力」とは、多様な生態系により構成されている自然界において自らの行動を律し、他者との協働や創造の楽しさを理解し、未来に希望をもって自立した生き方を探索できる基礎体験(自然体験・生活体験・社会体験)に裏打ちされた能力と考えられる。

総合的な生活力を育む学びの要素としては、自活力、自然対話力、協働する力、コミュニケーション力の4つが挙げられる(Chart 2)。

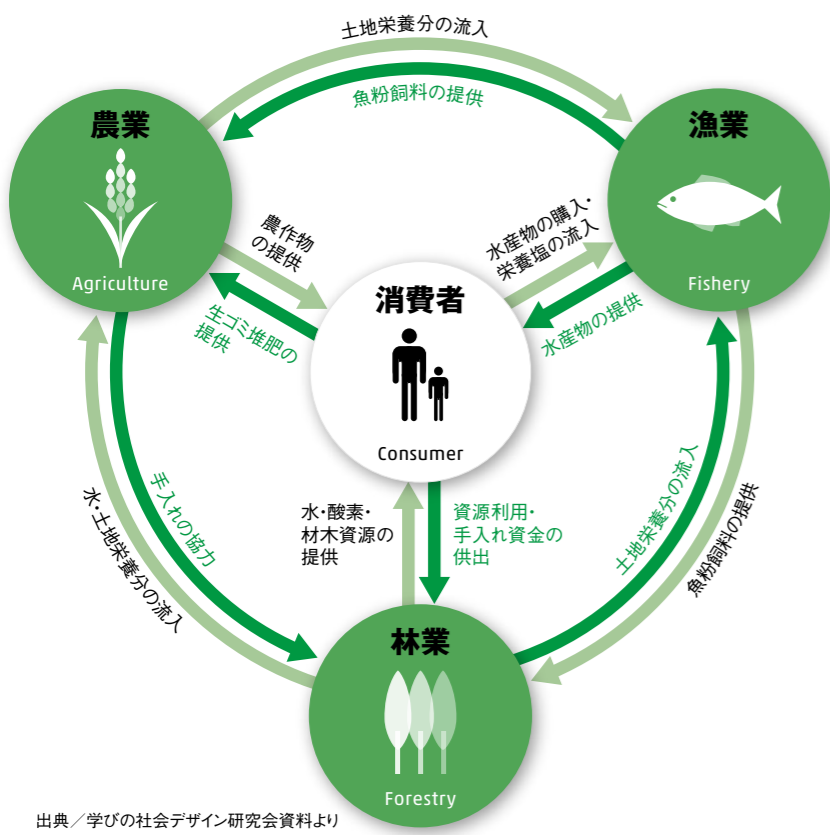
本研究を「学びの社会デザイン」としているのは、農・林・水産・消費の分野で総合的な生活力を育む取り組みによって、日本社会の持続可能性に貢献し、流動化する国際情勢にも対応できる人材を育成することを目指しているためである。これは、今後の日本社会の向かうべき方向性に大きく影響を与える。

研究会メンバーの体験学習事業実績や共通課題も踏まえ、社会教育および学校教育における総合的な事業展開の社会デザインを以下のように提案したい。

①点としての取り組み…第一次産業間

Chart 1

第一次産業と消費生活は互いに支え合っている



出典/学びの社会デザイン研究会資料より

体験学習プログラムでの実践例

体験学習プログラム2 林業

農地や海を豊かにする森林のあり方と人々の関わりを考える。

Step 1 不要な木を切る「間伐」

Step 2 伐採した木を使いやすい長さに切る「玉切り」

Step 3 玉切りした木を集積

体験学習プログラム3 漁業

森や農地、人々の暮らしとのつながりで成り立っていた漁業のあり方を捉え直す。

Step 1 カキの稚貝を付けたホタテをロープにくくる

Step 2 ロープを養殖イカダへつるす

Step 3 カキの身を出す

体験学習プログラム1 農業

農業・林業・漁業において、どのような学習や体験を体系的に行うことで、総合的な視野や自立した生活力を身につけることにつながるのかを実証する。

Step 1 水田を耕す

Step 2 田植え

Step 3 田んぼの草を抜く

Step 4 防鳥ネットを張る

Step 5 稲刈り

Step 6 脱穀

Step 7 収穫した米を飯盒で炊く

および生活協同組合コープこうべが所
有している森を予定している。
2013年5月より、大学生を対象
に、青年層の視点で体験を通じて学ん
だことを自己分析し、「総合的な生活
力」や「自立した生き方」についての
意識変化やプログラム内容の効果につ
いて評価を行うモデル事業を実施して

いる。
今後は、国や自治体、第一次産業の
関係団体・機関の協力を得て検討して
きたモデル事業の検証を行うとともに、
体制や資金面など持続可能な事業とな
るような仕組みの検討も進め、今回紹

介した学びの社会デザインおよび体験
学習プログラムを完成させることが急
務である。そして、このプログラムが、
これからの大きな社会変化に対応でき
る青年層の生活力の育成に貢献し、広
く水平展開できるように、行政および教
育機関、また他の機関・団体への提案
活動を推進していきたいと考えている。

大学生などの青年層を対象に、一般
的な農業の現状を理解するだけでなく、
年間を通じて農作業や林業、漁業など
を体系的に体験でき、また、第一次産
業や食を巡る課題、水、生物多様性、
エネルギー・環境問題などの座学も取

り入れた、総合的な体験学習プログラ
ムを策定した。
具体的には、農業体験は、田畑の草
刈り・耕耘、堆肥づくり、米・小麦・
夏野菜・サツマイモ・秋冬野菜などの
植え付け、水やり、草刈りなどの管理、
収穫である。漁業体験においては、カ
キ・わかめの養殖体験、魚のさばき体験、
林業体験においては、森林整備の実態

把握と間伐体験、また食育・火育（*2）
実習などを行う。研究会での報告とフ
ォローなども含め、年間計32回の体験
学習プログラムである（Chart 3）。
フィールドは、農業体験は、LEA
Fが兵庫県西宮市内の寺院の協力を得
て使用している農地、漁業体験は、兵
庫県漁業協同組合連合会の漁場、林業
体験は、兵庫県森林組合連合会の森林

（*2）「火育」とは、安全な
火のおこし方や扱い方、火を
使った調理など、子どもたち
が「火に親しみ、火を学ぶ」
体験を通じて、豊かな心を
育み、生きる力を高める教
育のこと。

体験学習プログラムの
策定と
モデル事業の実証

- ⑤ 幼児期から大学生までの年代をつなぐ継続的な取り組みのデザイン・保育所から大学生までの各年齢を対象とした学校内外での取り組みを時系列的に整理し、総合的な生活力を育むための体験的学びを体系化する。
- ④ 点・線・面の取り組みを有機的につなげるための共通目標を策定し、さまざまな機会を通じて、その必要性和活動の全体像について社会に提案を行う。
- ③ 面としての取り組み・各事業主体協力の下、さまざまな体験的学びを総合的にデザインした年間プログラムを作成し、青年層を対象に実施する。
- ② 線としての取り組み・各事業主体が連携して体験事業などを積極的に実施することによって、事業参加者につながりを理解し、その重要性を認識してもらう。

Chart 2

総合的な生活力を育む3つの体験

